自然をとりもどす保育

塩川寿平

一　保育と遊び場

保育の本質は子どもの生命活動のすべてをさすのであり、一・二の保育活動をさして保育が論じられてはならない。今日やもすると机に向かった保育活動が保育であり、直接知育にかかわらない活動は、保育の補助的活動として一段軽くみられる傾向がある。こうした傾向は保護者のニードに多く見られるわけであるが、専門の保育者でさえついまどわされがちである。今日あらゆるものが数量化され、その数値によって評価される時代にあっては、保育活動においてさえ目に見えるもの、数で表わされる物に努力が集中しがちである。今日いわゆるコンピューター時代とは、そのような努力を私たちに求めがちである。しかし、私たちが保育の本質としてめざすものは、子どもの人格そのものをはぐくむことなのである。人格のある一面を数量化して評価することは、人間のもっている一属性についての評価にすぎないのであり、すべてではない。特に、子どものもっている無限の可能性は、おとなが教えるとか与えるもの以上に、はるかに多くの可能性をもっている。

それゆえに、まず第一に私たちのなさねばならない努力は、子どもの無限の可能性に十分こたえていく環境条件の整備である。子どもの生活が遊びによって組立てられていることを考える時、当然子どもの全人格の発達を保障する環境条件として、遊び場について検討しなければならない。

また、豊かな人格形成とは、その子どものもっている無限の可能性があますところなく引き出されていくプロセスであり、戸外の遊び場で無心に遊ぶ子どもの姿の中に明らかに見いだす

ことが出来る。

六月下旬のことであるが、私は保育学科の学生の修学旅行に連れられて、十日間という北海道の旅をもった。北海道の雄大な景色に心打たれたことはもちろんのことであるが、広い草原や川原で遊ぶ北海道の子どもたちの姿に、私は雄大な景色以上に心を打たれた。職業柄というのであろうか、どこへいっても子どもの姿に目を引かれてしまうのであるが、それはすばらしい光景であった。真の子どもに出合った思いであった。

自然の中におかれている子どもたちの目はなんと輝いていることだろう。私が北海道の自然の中で出合った子どもは、例外なく活動している子どもの姿であった。無気力な都会の子どもの静的な遊びの姿ではなく、人生の一時間でもぼんやりすごすまいと、何かを夢中で追い求める動的な姿であった。何かを追い何かを求めて無心に遊ぶ子どもたちの姿から、生きていることを楽しんでいる、生き生きとした表情を見つけることは容易なことであった。私は「子どもがいる。まさに、生活している子どもがいる」とつぶやいたものである。

ここで大切なことは、子どものある一面を伸ばすことではなく、バランスのとれた人格形成を考えることであるが、この十日間の北海道旅行のあいだ私が考えつづけたことは、その目的に最も正しく答えてくれるのは、なんといっても自然の遊び場であるということであった。

遊び場の本質的価値の理論については、五月号・六月号で述べてきたとおりであるが、豊かな人格として私が希望する児童観

㈠ 創造性の豊かな子ども（精神の内的活動の健康）

㈡ 社会的役割のとれる子ども（精神の外的活動の健康）

㈢ 病気をしない丈夫な子ども（肉体の健康）は、まさに自然の遊び場の中で、バランスよくはぐくまれると考えられるのである。

二　ガラクタ遊び

保育には、自然すなわち広い空間と、十分な時間が必要である。空間は活動のためのスペースであり、時間は成熟のためのプロセスである。自然をとりもどした保育の中で、初めて空間と時間の必要性を確かめてみたい。

＊場所＝野中保育園

＊観察日＝昭和44年11月21日―12月1日

＊対象＝年長児（五～六歳）最初は四、五人で始まったが、徐に参加者がふえ、最終的には三十人参加。

＊遊びの始まり

部落づくり(1)

十一月二十一日、四、五人の男の子が遊び場に穴を掘り、木を立て始めた。「何だい」と聞くと「ジャングルだ」と答えた。この子どもたちは、先週バス旅行で動物園へ行ったのであるが、それに刺激されたらしく、〝ジャングルのゾウ〟を作るのだと言う。ボス的存在の子Y君は、一生懸命穴を掘っていた。そして「仲間に入れてほしい」という子には「板を持って来い」というふうに、仕事を与えることにより、仲間入りを許した。こうして実にこの日から十日間におよんで、遊びは展開されすばらしいゾウができあがったのである。

＊その経過

①十一・二十一　四、五人の男の子が〝ジャングルのゾウ〟を作り始める。穴が掘られ、ガラクタ置場から材料が運ばれる。この日早くももう一つのグループが生まれる。この第二グループは、第一のグループに入れてもらえなかった子どもたちである。

②十一・二十二　だいぶ出来上がる。さらにもう一つのグループが生まれ、全部で三グループとなり、ジャングル遊びは競争のような形になる。第一のグループは「ゾウ」。第二のグループは「ヘビ」。第三のグループは「くま」と目標が決まっていった。

③十一・二十三　リズムや言語の室内の保育が終わって自由遊びになると、みんな遊び場へかけていくようになる。

④十一・二十四　大風で外へ出られず。

⑤十一・二十五　きのうの大風と雨でジャングル部落はほとんどこわされてしまう。

⑥十一・二十六～二十九　再建。子どもたちは驚くほどよく働いて、こわれたところを次々になおしていく。保母たちも感激して、かげながら応援する。「エルマーの冒険」「ジャングル大帝」「ドリトル先生のアメリカ行き」等の本を読んでやる。

⑦十一・三十　子どもたちは「木箱をちょうだい」とか「ワラがあるといい」などと、保母に材料を請求するまでに熱中してくる。そこで保母は、農家を訪ねワラをもらい、商店へ行き、空箱を集めてこなければならなかった。

⑧十二・一　ついに完成。感激の日であった。

このことについて、園長の保育日誌には次のように書かれている。

『ジャングルの場所の設定が木のない遊び場になったため、いつのまにか部落のような形になった。作品の形がととのってくると、子どもたちは、ここが玄関、くつをぬぐ所、ここが裏

部落づくり(2)

ゾウさん

口等と家の形態をとって遊ぶ。「だれんおとうさん」(方言=だれが)、「わたしおかあさん」「赤ちゃんは二人さ」と家族構成もきまり、遊びながら仕事が続く。

グループの仕事といっても一人一人が適材適所に力を発揮している。道具、材料ともに十分与えられ、場所も広大なため取組みがいもあり、ぼんやりしている子がなかった。ゾウグループは、話し合いが多いグループで、最後までこまかい仕事を続けた。また、てんでに何やら忙がしげに、やたらにトントン釘打ちに熱中しているグループもあった。

部落らしくなってきたある日強風注意報が出た。このことを知らせると、真剣になって石をのせたり、タイヤでおさえて帰った。

翌日ある母親の話

「ジャングル部落だかってのが作ってあるからって、夜中に二度も雨戸をあけさせたですよ」

「あけるなってのにさあ」

子どもたちは完成が近づくと、朝の登園後、カバンを置くなり一目散に遊び場へ走った。

「もっとしっかりほっていれるべえー」

「おとうちゃんがちょっと来てくれりゃあらくだけんな」

「先生、つぶさないでずっと遊ぼう」

……大地を一歩一歩ふみしめて子どもたちは育つ！』と書いている。

★ガラクタ遊びの要点

①同園のガラクタ置場には、材料の板、角材、トタン、あき箱、棒、タイヤ、その他が管理されている。これらは家のとりこわしなどで無用となった古材であり、地域社会の人々の協力を得て日ごろから補充され管理されている。

②仕事は急ピッチに進み、みんな仲よく働いている。だがよく観察すると、一人一人自分の気に入ったようにやっている。このことは発達心理学がいう、五・六歳児の社会性の芽ばえ他者の立場を認識することと自己主張の接点を如実に物語っている。

すなわち、「ゾウ」を作ろうということでは共通の目的をもっているし、みんなで作るという共同作業であることもわかっている。だが、いざ作業にとりかかると、人のことなどおかまいなく、自分のやりたいように、自己主張を表現して作っていく。だからゾウの「右足」を作っている者と、「左足」を作っている者とではぜんぜんちがうものが出来ていく。また、この年齢の子どもは、非常に発達の個人差があり、集団指導のむずかしいところである。たとえば、発達の差のあるA

クマさん

Bを考えた場合、発達の進んだAに合わせれば、Bには負担であり、Bに合わせれば、Aにとっては課題が低すぎてつまらなくなってしまう。おとなであるならばがまんして平等な作業をするのであるが、子どもたちはまだそこまで発達していない。もしこの年齢で共同作業という社会性に気をとられすぎ、形式的に平等な作業を与える指導を強行するならば、A、Bにとって不幸なことである。それはたがいに自己主張をおさえられ、自己の発達レディネスとちがった課題に取組まなければならないからである。また社会性は与えられるものではなく、相互の自己主張の相剋の中から養われていくものである。この五・六歳の発達段階においては、自発性を尊重し、十分な自己主張のもとに、自己の能力のすべてをぶつけて作業するように指導したいものである。この自発性にもとづいた行為こそ創造的能力を養うものにほかならない。

ゾウの足がビッコに出来上がったとしても、そのことが問題なのではない。問題は、その共同作業の中で、一人一人の力がどれほど完全に出しきられているかということである。作品の評価は、個々の子どもの個性が、その作品の中に十分生かされているかということである。すなわち、制作の過程の子どもが大切なのであって、出来上がった作品が大切なのではない。子どもたちは、こうした遊びを通して自己主張し、自発性は尊重され、(=受容されて)創造的能力が養われていくのである。同時にこの自己主張は、相互の葛藤を生み、その葛藤克服の努力から社会性を学んでいくのである。こうして独立した人格というものが形成されていくといえる。

③風に吹き飛ばされ、一大試練にたたされたが再建。ゾウ、くま、ヘビともそれぞれ完成まじか。「もう少しだよ」子どもたち、はりきる。何人かけがをしたが、保母の手あてを受けると、またすぐ遊び場へもどっていった。けがでやめる子は一人もいなかった。

④十二・一　ついにジャングル部落完成。〝ゾウ君誕生〟このゾウのお腹の中にはこのグループのメンバーのみはいることが許されている。ほかのグループの子どもたちはとうとう入れてもらえなかった。著者も「入れてよ」とたのんでみたが「だめ！」といわれてしまった。ゾウのおなかの中にはいった子どもたちは、家の形態をとって、おとうさん、おかあさん、赤ちゃんをきめて遊んでいた。

⑤ヘビと沼だという。彼らは沼の中の大蛇にまたがって大喜びであった。ヘビはワラのたばで作られ、まさに大蛇といえるものであった。先の部分に赤い布がはさんであったので「何？」と聞くと、「舌じゃんか」と答えた。非常にこまかい神経をつかっているのである。日ごろの観察の鋭さ、そしてたく

みな表現であった。

また、ある子どもは、この大蛇は「空も飛べるんだ」と言っていた。

また、くまグループのくまの目はビールのせんで作られてあった。このようなことはだれも教えたことではなかった。

★以上、ガラクタ場を中心とした遊びの展開を考察してきたわけであるが、この遊びの成功の要因は、

第一は、なんといっても子ども自身のもつ自発性にもとづいた、すばらしい創造の力である。

第二は、時間と空間、すなわち豊かな自然の遊び場があったことである。

第三は、高度にトレーニングされた保育者が、いたことである。「ジャングル大帝」などの本を読んで、子どもたちの動機（モチベーション）を強化してやったり、材料、道具を用意し、また同時にけがの手あてなどに専念するなど、サイコドラマでいう補助自我の役をとってやったことである。

第四に、ガラクタ置場があり、材料が日ごろからたくわえられていたことである。

第五に、管理が十分なされた遊び場であること。特に、このように連続して日々遊びをつみかさねていく造形遊びでは、制作物の保存がなされなければならず、管理された園独自の広い遊び場でなければ不可能である。以上の五点が指摘される。

三　小動物と保育

都市化の中で小動物たちは絶滅していく運命にあるのかもしれない。だが、ただ絶滅していくことを見守っていてよいのであろうか。自然のもっているすばらしい人間陶やの力を、みすみす失ってよいわけがない。ここでは、特に今日的課題として、保育における小動物の考え方を試み、自然をとりもどす保育の大切さを考えたい。

1　小動物の考え方

遊び場には、一見なんでもないようなものがある。それは〝草のしげみ〟であり〝土の小山〟や〝坂道〟である。しかしそれらが絶好の遊び場であることは、周知のとおりである。そこで草むらにひそむ小動物について注目してみよう。遊び場をより質的に豊かなものとして与えるために、不可欠な要素として小動物をとらえたい。

小川や水たまりは、水遊びやどろんこ遊びの場となるばかりではない。子どもたちはその中から、たちまちカエルやドジョウやアメンボをつかまえる。草むらの中からは、コメツキバッ

タやイナゴをつかまえるのである。これらの遊びは子どもたちに信じられないほど豊かな活動を要求する。忙しく動き回ることは、肉体のみならず、精神の働きをも活発にするのである。トンボをつかまえようと、全神経を指先に集中して指を回しながらトンボに近づく子、ドジョウをとろうとして、全神経を足に集中しながら小川をさらう子、逃げられてしまった蝶のあとを追う子、こうした遊びの中で子どもたちのデリケートな精神は養われる。

子どもたちが生きものについて考え始める時、自らの生命についても考えはじめる時なのである。夢中でおいかけつかまえた大切な赤トンボが、虫かごの中で死んでしまった時、子どもたちは生命に限りあることを知るのである。生きとし生ける物には、生命のあることを知り、一たび死んだ物は二度と生きかえらない、自然の節理を知るのである。その時こそ人間の生命の尊さについても、実感をもって理解するのである。

2　犬と子どもたち

『アルダ』(犬の名)は、子どもたちにとって大切な仲間である。なぜなら、仲間はずれにされてしまった子どもが一人でめそめそしていても、その子の手をなめてなぐさめてくれる。その子のだれにも言えない心の悲しみを、静かに聞いてくれる。たとえまちがった自己弁護の告白であっても、アルダは聞いてくれる。

こうした仲間から拒否されてしまった子どもであっても、アルダ(＝小動物)は迎えて(＝受容)してくれるのである。子どもは自分の気持をすっかり告げてしまうと、落着きをとりもどして、ふたたび仲間のところへ帰っていけるのである。

また、友だちからきらわれていた、攻撃性のあるT(五歳)は、アルダに対しても石をぶつけたり、棒でたたいたりしたものである。だが訓練されたアルダはじっとこらえていた。やがて三カ月もすぎるころ、Tの攻撃する姿はほとんど見られなくなっていった。と同時にTは友だちの仲間に入れてもらえるようになっていったのである。相手が人間であったあいだは、Tがたたけば必ずたたきかえされたものである。だがアルダはじっとこらえていた。その対応のちがいが、Tの反省をうながし、性格をつくりかえたと考えられるのである。たたくことでTの気持は発散され、たたきかえされずにすんだことで気持は満たされ、こんどはアルダがかわいそうだと落着いて考えられるようになったのだと思われる。やがてTはほかの子がアルダをいじめているのを見ると「かわいそうじゃんか」とアルダに愛情を示しているのである。

もちろん小動物は遊びの主役になることはない。主役は子ど

もであり、遊びは小動物に関係なくくりひろげられている。だが、その場面に小動物が現われたことで、子どもたちの遊びに与える影響はきわめて大きく、複雑なものである。アルダが来るのを見て、ママごとをしていた女の子は、童話の赤ずきんちゃんを思い出したのか、「オオカミが来たから大いそぎでお使いしてきたの」と仲間のおかあさんに報告していた。

ボール投げしていた男の子たちは、ボールをアルダにじゃれさせながら、とられまいと大さわぎであった。

時には「アルダのバカ、オタンチン」などと、通常許されないような罵倒の言葉もあびせられるのである。だがアルダならば寛大に聞き流してくれる。それは、小動物によって子どもたちの気持が自然のうちに支持され、受容されていることを示している。

アルダに子犬が生まれた時のことであるが、子どもたちの驚きと喜びは大きかった。アルダと仲よしだったSは、アルダにおやつをそっくりやってしまったほどである。また、どの子も子犬を抱きたがりとりっこであった。愛らしい子犬を見ておこり出した子どもは一人もいなかったし、いじめる子もいなかった。やわらかい毛ざわりと、暖かさを手に感じながら楽しみ、よちよち歩きを笑った。また「赤ちゃん」と呼んで自分たちの遊びの中に位置づけていた。子犬がおしっこをすると「まあ！なぜ教えないの」　「おべんじょって言うのよ」と懸命に教えていた。

このような遊びの中から子どもの情操は豊かに育てられるのである。

3　ヤギと子どもたち

野中保育園で飼っているヤギも、犬と同様非常に大きな価値がある。子どもたちは鳴き声をまねることが大好きであった。どの子も例外なく「メー」と鳴いてみる。犬のように知恵はないが、乳を出してみせたり、背中に子どもをのせたりして、子どもを喜ばせる。すごい勢いで草を食べることは、子どもたちの食欲を増進させた。親ヤギと子ヤギのたわむれは、あきることなく子どもたちを楽しませる。こうした光景をながめることは、遊びつかれた子どもたちの絶好の休息である。遊び場にはこうした意味の休息の場もほしいものである。

4　カメさんごっこ

カメさんごっこは子どもたちの大好きな遊びである。二歳児クラスの保育一例であるが、園にいるカメさんを日ごろから見ているこの子どもたちは、自分たちの造形したこうらをつけて

もらうと、たちまち四つ足で歩き始める。また、首をひっこめる。子どもたちの一つ一つの動作の中から小動物の与えている力の大きさがうかがえるのである。

実際にカメを見ている子と、見たことのない子では、遊びに打ち込む態度がまったくちがうのである。

5　カエルとり

野中保育園には、小川や池や小さな水路がある。そこには、カエル、どじょう、沢ガニ、いもり、げんごろう等の小動物がいる。いまカエルを例に考えてみよう。

雨ガエルといぼガエルをT（四歳）、S（四歳）が小川のところでつかまえ、K（一歳十一ヵ月）に見せて得意の笑顔である。Kはプールの中で保母の背にとまった殿様ガエルをつかまえようと、指先に全神経を集中させて静かに近づく。そしてみごとに殿様ガエルをつかまえた。

こうした遊びは、自然の遊び場と、そこに小動物がいることによってはじめて可能なのである。前述のKは一歳十一ヵ月であるが、こうしたカエルをつかまえる遊びを通して、神経の集中、運動の敏捷性、成就の喜びを経験学習しているのである。このことについて園長は「この自然の中には無数の宝物がかくされております。保育園が新緑に包まれるころ、子どもたちは手のひらに毛虫をのせて、その美しさにみとれ、やがて毛虫のおしりをつついて競走させて遊ぶ。冬眠からさめたカエル、ヘビ、トカゲの寝床をさがしだすと、保育室の回りはそれを入れたバケツやあきカンでにぎわいます。新任の保母は悲鳴を上げるが、子どもたちは保母がなぜさわぐのかわからない。子どもたちは、大地の中で動くもの、生命のある生きもの、すべて身近な親近感を感じているのです。それがグロテスクだと感じるのは、おとなの既成の感覚なのでしょう。こうした自然の環境の中で育てられた子どもたちの精神は自由で、絵をかくのにも友だちのまねをしたりすることはほとんどありません」と述べている。

6　遊び場の仲間になったヘビ君

野中保育園においても、ヘビは特別のものであった。ヘビは化けるとか、ヘビに出会うとたたりがある、などという迷信が伝わっていて、子どもの中には、恐怖のあまりヘビさえ見れば石や棒でたたき殺してしまう者がいた。逆に泣き出してしまう子もいた。

しかしこのことは、生きものを大切にしようという園の遊び場のビジョンに反することであった。それゆえ、園では遊びの指導としてヘビについて考えなければならなかった。そこでな

ぜヘビがこわいか子どもたちに聞いてみた。その理由は、①気持がわるい　②化ける　③たたりがある　④かむ　⑤まきつく等であった。

まず①の気持が悪いについては、カナダの心理学者ヘッブの実験をもとに外林大作は次のように述べている。「過去の経験によってつくりあげられた大脳の過程と現在の過程との間に不一致がおきる。この不一致が恐怖をおこす。逃避するのは、この不一致をなくすためである」と、すなわち、こうした恐怖心は、なれることによって克服されることなのである。

つぎに、②③の「たたる」や「化ける」は科学的な根拠がないことである。結局、④⑤の「かむ」　「まきつく」が問題となった。毒蛇であるなら、かまれたら大変である。そこでこの土地に長く住む農家のおじいさんを呼んできて、ヘビについての話をみんなで聞いた。その結果、この土地には毒蛇はいないことがわかった。種類は、

1やまかがし（最も多い）　2青大将（大きい）　3しまヘビ（最も美しい）　4地もぐり（小さい）以上の四種であるということもわかった。

また人に害がないばかりか、野ねずみなどをとって食べるのでお百姓さんにとってはよい動物であることも知ることができたのである。

ヘビと遊ぶ一歳児

以上のことからヘビを殺す理由のないことがわかった。生きものを大切にしましょうといいながら、害もないヘビが今まで殺されていたのである。そしてあらためてヘビを見るとき、その美しさに強く感動したものである。

生きとし生ける物の生命を大切にしようという園の遊び場に対するビジョンは、こうしてヘビも遊び場の仲間にしていったのである。

年長組では、農家のおじさんに教えてもらったとおりに、ヘビの頭をおさえて、おっかなびっくり持ってみた。勇気を出して持ってみると「ヘビって意外にキレイなもんだなあ」と感

ヘビをかわいがる子どもたち

心してしまった。一ヵ月もすぎたころ、すっかり子どもたちはヘビになれ、上手に頭をつかんで持てるようになった。遊び場で出合ってももうこわくはない。仲よしの遊び友だちになったのである。こうして、いわれなき恐怖や殺害をくりかえすことはなくなったのである。自然の遊び場においては、このような指導が必要であることを、ここに明記しておく。

その後、子どもたちは、一層のびのびと、そして積極的に生活できるようになった。科学的な方法で恐怖をとりのぞいてやることは、子どもたちをいじけさせずに、のびのびと育てることになるのである。―おわり―

（静岡厚生保育専門学院）

注　参考資料

外林大作「心理学入門」　誠信書房